
妄想の世界

兼一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妄想の世界

【Nコード】

N0645Z

【作者名】

兼一郎

【あらすじ】

この小説は『魔法少女リリカルなのは』の二次創作です。

小説の内容は現実の世界から唐突にアニメの世界に無意識の内に移動してしまった人間が元の世界に戻る為に頑張りますよ、という健気でよくある二次創作のお話です。

二次創作もとい小説を書くのは生まれて初めての経験なので生暖かい目で作品を読者の方々に読んで頂ければと思っています。

『魔法少女リリカルなのは』の二次創作はたくさんありますが、そんな先の先人たちの作者様方の作品に私の作品が埋もれないように

頑張りたいと思っています。

注意事項

『魔法少女リリカルなのは』の二次創作です

この小説を読むにあたって以下の注意事項を読んでください

- ・ 作者はまったくの素人で小説を書くのは初めてです
- ・ 非転生のオリジナル主人公がこの小説の主人公です
- ・ 原作キャラクターを私なりに表現していますので原作とイメージが合わなくなるかと思っています

- ・ 小説の更新ペースが遅いです

以上の注意事項を読んでそれでも読んであげましようという読者様方

作者の駄文ですが少しでも楽しい時間に費やせたらいいと思います

第1話

壁に架けられた丸時計が午前1時を針で指し示していた。

人の出入りが疎らになった深夜のコンビニで会計を済ました若い男が片手にコンビニ袋を携えてコンビニから優々とした態度で出てくる。

若い男の名前は速水健一。はやみけいち

歳は二年前に成人を迎えた二十二才。

今年、私立の大学の卒業をまじかに控えている大学四年生である。一年間という期間をかけて制作した卒業研究の発表を明後日に控え、自宅の自室でパソコンを前に缶詰状態だったので寝不足気味の健一はコンビニで軽い夜食を買い付けに来ていたのだ。

健一はコンビニ前に停めていた自分の自転車の前カゴに夜食の入った袋を放り、自転車に跨るとペダルに足を降ろした。

深夜の静寂な雰囲気の中、健一の乗った自転車が人気のない住宅街の街道を街灯に照らされながら人が歩くより若干早い速度で進む。

「俺も今年から社会人啊……」

寝不足で思考がうまく纏まらない健一は唐突に独り言を呟いた。

四年間という大学生活に区切りをつけて今年、健一は四月を迎えると新社会人となる予定だ。

大学で友達が一人もない自分が、まさか内定をいただける企業があつたことに健一は大学の卒業をまじかに控えた今でも信じられない。

” お前が想像している以上に社会は甘くないぞ ” ふと健一の頭の中で厳しい彼の父親の言葉が唐突に過ぎる。

内定が中々決まらずに卒研も就活も諦めて部屋で閉じこもっていた健一に父が鉄拳制裁と共に彼に言った言葉だ。

健一の頬に熱い熱がこもる。嫌なことを思い出した、と健一は感情を高ぶらせペダルを漕ぐ足に力をこめた。

人気の無い住宅街を自転車で通り抜けようとペダルを漕ぐ健一に突然、違和感が訪れる。

健一の頭の中に唐突な頭痛を伴う耳鳴りが響くと同時に、彼が立つアスファルトの地面が縦横に波をうつて大きく揺れたのだ。

「地震っ?!」

頭痛を伴った突然の大きな地震に自転車のハンドルを握るのが困難なほどに健一は驚いた。

だが、健一の周囲に佇む住宅街の家々は地面を大きく揺らす地震にまるで気がついていないように家の明かりひとつ、悲鳴ひとつあげることなく静寂だった。

自分と周囲の温度差に違和感を感じながらも、健一は狼狽しつつ揺れる地面に逆らいながらなんとか自転車のペダルを漕ごうとしたふと、健一は深夜の夜空に視線を移した。そこには風になびくカーテンのようなドス黒い何かが夜空の暗幕をオーロラのように揺ら揺らと波打ってなびいていた。

その不可思議な夜空の現象に健一は驚愕して目を奪われるが内心ではとても気分が良いものではなかった。

普通のオーロラは見るものを惹きつけて魅了するが、健一の見ただけは見るものに不快感と嫌悪感そして苛立ちを与えるのだ。

「うつ……!?!」

健一の身体に異変が唐突に起きる。

健一は自転車の足を止めて深夜の住宅街の街灯の下で胸の内から込み上げてくる吐き気を抑えるようにその場で立ち止る。

「……うつ……おえあ……」

健一は口元を両手で覆いながら吐き気に堪えず自転車のスタンドを立てることもせずにその場で自転車を乱雑に倒した。

自転車の前カゴから放り出されたオニギリとサンドウィッチが地面に点々と転がり落ちる。

「……も、もう、無理……おええ……」

唐突に襲われた原因不明の吐き気に堪えられずに健一は胸の中にあった不快なモノを盛大にアスファルトの上に吐露した。

腹の中にあつた不愉快なモノ全てを吐き出すまで健一は肩で息をしながら吐き出し、衰弱して虚ろな瞳を浮かべると地面に吐露した汚物の異臭に眉をひそめた。

健一が吐く物を吐いてスッキリした落ち着いた頃には地面を揺らす地震も夜空に映る奇妙なオーロラも全て何事もなかったように身を潜めた。

「……いたい、なんだったんだ……？」

突然、自分の身を襲った吐き気と異常気象と天変地異に健一は怪訝に思いながらも深呼吸をして体調を整える。

健一は地面に投げ出された食料を拾いあげて自分が吐露した汚物を遺憾ながらもそのまま放置して再び自転車に跨ると自宅に向かつてペダルを漕ぎ始めた。

健一が彼の自宅に到着したのはコンビ二を出てから一時間程、時間が経過した頃だった。

いつもより倍の時間をかけて帰宅した健一は自宅の庭に自転車を停めるとコンビ二の袋を片手に自宅の玄関に向かう。

ポケットにしまつてあつた家の鍵を取り出して玄関の扉の鍵穴に

鍵を差込み左に回す。鍵が開いた玄関の扉を開くと「ただいま」と寝静まる家族に挨拶をしてから家に入った。

健一は玄関から家に行くと明かりの灯らない廊下を進み、寝ているだろう家族を起こさないように抜き足で階段を二階へと昇って自室に向かった。

普段どおり自分の部屋まで辿り着いた健一は部屋の扉を前にして唐突な違和感におそわれた。

「なんだ、これ？」

違和感の正体は部屋の扉に『まやの部屋』というファンシーなネームプレートが飾られていることだった。

コンビニに行く前には無かった、身に覚えの無い飾りに何かがおかしい、という違和感を抱きながらも健一は扉を躊躇い無く開いた。開かれた扉の先にあったのは速水健一の部屋であるはずである。だというのに健一の視界に映ったのはまったく別の主が住んでいる部屋だった。

扉を開いた瞬間に匂う女の鼻を突く香水の匂い。女々しい部屋のインテリアに彩られた男つ気が全く無い部屋の内装。そしてベッドの上で吐息をたてて寝ている見知らぬ若い女。

「……えっ？」

健一は絶句した。この場は確かに自分の家の筈だし、ここは自分の部屋だったはずなのにいつの間にか自分の知らない女が住み着いていたのだ。

部屋の内装も必要最低限のモノしか置いていなかった健一の部屋は今では女々しい若い女仕様の居心地最悪な景観へと様変わりしていたのだ。

コンビニに出かける前までは確かに自分の部屋だったはずなのに、

この短時間でどうやったらここまで部屋の内装を入れ替えることが出来るのか、そしてこの寝ている女は誰だ、など色々と頭を痛ませる疑問が尽きないがとりあえずは健一は行動をおこした。

「あの、ちょっと。ここ俺の部屋なんですけど……！」

勝手に自分の部屋を改造して我が物顔で寝ている若い女に健一は彼女の肩を激しく揺すって起こそうとした。

「……うーん。まだ早いよお。寝かせてよお」

肩を揺する健一の手を払いのけて女は再び吐息をたてる。

「ちょっと、あんたっ！　いいかげんにして起きろってばっ！」

若い女のいつこうに目覚めそうに無い態度に健一は怒って毛布を引っぺがすと女をベッドの上から強引に引きずりおろそうとした。

これにはさすがに堪えたのか、若い女は意識を覚醒させると額に青筋を浮かべる健一に文句を言った。

「もう、やめてって言うてるでしょっお父さ……ん？」

目を覚ました若い女は悪態をつきながら健一の顔を凝視した。そして直ぐに驚愕した様子でベッドから飛び起きると健一から逃げようとして部屋の角へと後退した。

「あ、あ、あんたっ！　いったい誰なのよっ！？」

若い女は長い髪を寝癖で乱れさせながら狼狽する。

女の意味不明な台詞と態度に健一はそれはこちらの台詞だと、怒

りを露にした。

「それはこっちの台詞だっ！　ここは俺の部屋だったの！」

「はあ？！　なに言ってるのよ！　ここはあたしの部屋だったの！」

「いつからここが女の部屋になったんだよ！　ここはずっと前から俺の部屋だ！　出て行けっ！」

「なに意味のわからないこと言ってるのよ！　出て行くのはあんたの方よ！」

「なんだとう！」

健一は自分の部屋を勝手に模様替えしたにも関わらず部屋から出て行く気配さえ見せない傲慢な態度の女に拳を振り上げて詰め寄った。

健一に詰め寄られて身の危険を感じ取った女は顔を恐怖に引きつらせる。

「お父さーっんっ！　お父さんっ！　助けてーっ！　早く来てーっ！」

耳の鼓膜を過剰なまでに振動させる甲高い若い女の悲鳴に健一は目を白黒させて驚き、その場でたじろいだ。

深夜の住宅街の全域に響き渡るような悲鳴に家の周りにある家々の窓に光が灯る。

「どうしたんだっ！？　マヤっ！」

娘の悲鳴を聞きつけてドタドタと慌しく家中に足音を響かせて一階で寝ていた彼女の父親が二階に上がって来るとすぐさま健一の部屋に乱入してきた。

涙目で身体を竦ませながら部屋の隅で震える娘と見知らぬ若い男が娘に乱暴をはたらこうとしている瞬間を目撃した父親は健一に殴りかかった。

「うちの娘に何をした貴様あーっ！」

突然の不意打ちによる奇襲によって健一は為す術も無く自分の知らない他人の父親に顔面をタコ殴りにされた。

状況が全く理解できない健一は娘の父親に殴られながらも「あんたらこそ俺の家でなにしてんだ！」と逆上しながらそれに応戦した。健一と娘の父親による大乱闘が狭い一室で行われている間に家の一階では娘の母親が受話器を手に取り警察に通報していた。

深夜の住宅街に響くパトカーのサイレンの音。その音を聴きつけて住宅街の家々から野次馬が飛び出してくる。

「娘の部屋に知らない男が……！」

家の一階から聞こえる母親の泣きそうな声。他人の父親と殴りあいをしながらも健一の耳にはその声がはっきりと聞こえた。

複数の人間が慌しく階段を上ってくる足音。そして健一の部屋にゾロゾロと大所帯で現れた制服に身を包んだ公僕ども。

「若い男の身柄を拘束しろっ！」

公僕のひとりの一声でその仲間達が暴れる健一の身柄を容易く拘束した。

多勢に無勢とはこのことか。健一は大人しく公僕に身柄を拘束さ

れながら「ここは俺の家だ！」と一点張りの主張を続けた。

だが詳しい話は署の方で聞く、と警察官に話を聞いてもらうことも出来ずに健一は身柄を拘束されたままパトカーに乗せられた。

「……それで君は自分の部屋に戻ってきたら見知らぬ人間が居ただけだ、と言いたいんだな」

「だから、さつきからそう何度も言っているじゃないですか！」

ここは警察署にある取調室。パイプ椅子に座り事務机を挟んで健一と警察官が問答をしていた。

「だが、あの家に速水健一という男が住んでいるなんて届出は出ていない」

「そんな馬鹿な！？　だって俺はあの家で家族と一緒に二十二年間住んでいたんですよっ！」

唐突に告げられる冗談にしてもたちの悪い真実に健一はありえないと頭を横に振った。

「だから、君がいうその家族も速水健一が住んでいたなんて記録はどこにもないんだ」

「そんなことがあるわけがないですっ！　俺と家族は確かにあそこで暮らしていたんですよ！」

事務机を激しく叩いて健一が警察官に激しく抗議するが警察官は依然と健一の供述を信じようとはしない。

そして警察官はおもむろに制服の内ポケットから事務机の上に健一の運転免許証を提示した。

「話は変わるが、君から押収した財布の中に入っていた自動車の免許証のことなんだが……」

事務机の上で自分を見つめる運転免許証の写真の自分を指で指し示しながら健一は抗議する。

「ほら、ここを見てください！ 免許証に自宅の住所が書いてあります！ これが俺がアソコで住んでいる証明になるはずですよ！」

身分を証明するのに便利な免許証を警察官の前で示すことで健一は自分の口述に嘘は無いと言いたかった。

だが、警察官は健一の言葉に眉をひそめると不機嫌そうに顔をしかめた。

「そうならないんだよ。これさ、よく作られてはいるが君の持っていた免許証は全くの偽物だ」

「……えっ？」

健一は信じられない、と首を横に振り警察官の瞳をすぐるような目で見た。

そんな健一の視線を目を逸らして警察官はイライラした苛立ちを表情に露にしながら厳しい口調で言う。

「どこでこんなモノを作ったんだ？」

「俺はそんなことしていません！」

「じゃあ、どこで手に入れたんだ？」

「俺はちゃんと教習所に通って、免許センターで試験に合格したから、その後に発行してもらって……」

「嘘を吐くんじゃないっ！」

ドンっ！と警察官が健一を脅すような表情で事務机を叩いた。机を叩かれて健一は身をビクツと竦ませる。

「持っている免許証は偽物といい、さっきからデマカセの供述しかない。警察を舐めてんのか！」

「俺は嘘なんて言っていないですよ！」

「それが嘘だつて言ってたんだ！ 正直に話さないようならこちらにも考えつてもんがあるんだぞ？」

警察官はその場で椅子から立ち上がると乱暴に速水の胸倉を掴み、拳を握り締めて振り上げた。

胸倉をつかまれて息が詰まりそうな状態で涙目ながらも健一は警察官に自分は嘘を吐いていない、と供述を続けるがその口に警察官の握り拳が叩き込まれた。

顔を正面から殴られて鼻を押さえながら床にうずくまる健一に警察官は更に乱暴を続けた。

「ほら、はやく本当のことを言え！ こっちはな、お前の戸籍すら無い事は判っているんだ！ おまえ、さては日本人に成りすました不法入国者だな？」

「お、おれは、日本人だし……戸籍が無いなんて、ありえるはずがないですよ……！」

警察官に床にうずくまり身体を足蹴にされながらも健一は声を大にして叫んだ。

「口答えするな！ 現に貴様の戸籍が無かったんだからお前は不法滞在者になる。おまえ、どこの国から日本に来たんだ？ 目的はなんだ？ 金か？ 女か？ それともクスリか？」

「そんな身に覚えの無いことを、俺が知っているわけがないじゃないですか……！」

「まだ言うかつ！ この犯罪者の分際で調子に乗りやがって……！」

無抵抗な健一を暴力で屈服させる尋問は一昼夜続けられた。

尋問の結果、健一から口クな情報を聞き出せなかった警察は健一の身柄を拘束して警察署にある拘置所に一旦、閉じ込めることに決定した。

警察に心身ともにボロボロになるまで身に覚えの無い罪で尋問を続けられた健一は冷たくて暗い拘置所の中で三日間、獄中生活を続けさせられることとなった。

三日間の獄中で健一は自分の身に起こった出来事を頭の中で整理しようとしていた。

コンビニに買い物に行った帰りに奇妙な出来事と吐き気に襲われた。

次に健一が自宅に戻るとそこは見知らぬ他人が住んでいる彼の自宅ではない他人の家だった。

そして健一が持っていた本物のはずの免許証は偽物で彼の戸籍が

嘘のように抹消されていた。

……まるでパラレルワールドに迷い込んでしまったようだ

現実的な考えではない御伽話のようなキチガイじみた考えを獄中にいる間に健一はそう結論づけることとした。

どこか自分の知らない、でも、とても自分の知っている世界によく似た他の世界に突然迷い込んでしまったのだ。

健一はそんな途方もない妄想を頭の中で考えつつ、この妄想とも現実とも判断出来ない世界を憎んだ。

警察官からの理不尽な暴力による憎しみ。自分の居場所をこの馬の骨とも知れない他人に奪われた憎しみ。大学の卒業をまじかに控えていたのに全ての苦労が水の泡と消えた憎しみ。

……憎い、憎い、憎い、憎い。

そんな理不尽な現実に、自分の平穏な生活を唐突に奪った現実に健一は獄中の中で世界を呪った。

一台のパトカーが都心の大通りを車の流れに身を任せながら走っていた。

そのパトカーに乗車しているのは運転手の警察官が一人と後部座席にはひとりの若い青年を挟み込んで座る警察官二人。合計で四人の人間がパトカーに乗車していた。

このパトカーは不法入国と不法侵入それから身分詐称に偽造という罪を負った容疑者の青年を刑務所に移送する任をおびていた。

慎重な運転でパトカーは人通りが激しい道路の交差点に差し掛かると赤信号につかまりその場で信号待ちの車列に加わった。

「おい、あれなんだ？」

その声は交差点で信号待ちをしていた彼女を連れた年若い男の声だった。

「えっ？ なにか言った？」

年若い男の隣で佇み、彼と一緒に信号待ちしていた彼女は交差点の騒がしい人々の喧騒に耳を奪われて彼の言葉が良く聞こえなかったので聞き返した。

「ほら、あれだよ、あれ」

彼は天高く頭上を指差して彼女に指し示した。それに釣られて彼女は彼が指差す方に視線を移す。

交差点の周りに伸びるビルの間から覗く狭い空に輝く一点の蒼い光。それは真昼の快晴の空の色よりも濃厚な蒼の色だった。

「ほんとうだ。でも、とっても綺麗な光……」

どんな深い海の色よりも蒼く、どんなに天高く仰ぐ蒼穹の空よりも綺麗な蒼の光に彼女は目を奪われた。

交差点で信号待ちをしている他の人間たちもその蒼い光に気が付くと皆が空を見上げた。

「あれ？ なんだか、あの光が近付いてきているような……」

視界に映る蒼い光りが段々と光源を空に広げて天から地へと落ちていく。落下予想地点は都心の交差点。人間が蟻のようにひしめく都会のと真ん中だ。

「やばいんじゃないのか……！」

真っ直ぐに自分達の居る場所に向かって堕ちてくる正体不明の蒼い光に若い男は慌てた様子で彼女の手を握りるとその場から逃げ出すように踵を返した。

そんな一組のカップルの行動に周りの人間達も悲鳴をあげながら交差点から逃げ出す。

都会のど真ん中は秩序を失った人間達の阿鼻叫喚な悲鳴と喧騒に包まれた。

赤信号を無視して交差点を渡り出した人間達の姿をパトカーの中から警察官が拡声器を口元に押し付けて叫んだ。

「落ち着いてください。慌てず、落ち着いて、信号を無視しないで……！」

パトカーの車内からは空から落ちてくる蒼い光が見えないので警察官たちは突然起こった人々のパニックに意味が判らずに怒声を上げることしか出来なかった。

人間の理性を失った悲鳴が聴こえてくる。人間の恐怖に怯え逃げ惑う姿が視界に映る。

人間の、人間の、人間の……！

「アハハハハハッ！ こんな妄想の世界は、ゼーんぶつ消えて無くなっちゃえばいいんだッ！」

狂った機械のように笑い、狂言を口走り、世界の破滅を懇願する人間の名前は速水健一。

理不尽な現実を呪い、憎しみ、破壊することを選んだ青年。

パトカーの中で突然、笑いだした健一に彼を挟んで両隣に座る警

察官の顔が引きつる。

その瞬間、健一が乗るパトカーに天空から堕ちる蒼い流星がピンポイントで衝突した。

一瞬の静寂の後にパトカーは天井に大穴を開けて中に居た人間を巻き込みながら爆発した。

第1話（後書き）

この作品の主人公は次元震によって現実からリリカルな世界に移動してしまつた人間のお話です。

主人公の健一はリリカルなのはの知識は持ち合わせておりませんのでハーレムな世界を目指して頑張ります、といったオリ主ではありません。

元の世界に戻る手段を捜してリリカルなのはの世界で奮闘する男のお話を描きたいと思っております。

ご意見、ご感想をお待ちしております。

第2話

「おい、見てみるよ。ほら、一番前の席でまたアイツが座ってやがんの。マジで友達いねえのな」

「うわぁ。ほんとだ。マジで笑えるんだけど。大学に来てまで友達がいないとかないわー」

……うるさい

「君ねえ。こんな基礎的な事が判らないでどうやってたら卒研が出来るわけ？ もう一度、一年生からやり直した方がいいんじゃないの？」

「なーんで、俺がお前の卒研を手伝わなきゃならねえんだよ。教授から頼まれてもお断りだわ。でもなあ、どうしてもっていうんなら……ほら、誠意を見せろよ。お金でな」

……だまれ

「えーっと、うちの会社がやっていることに興味があるからうちを志望した、ねえ……。うちは社員全員が横つながりが大事な職場だから君みたいな暗い子はいらなかな」

「はっきりと言うとさ。君、大学で友達いないでしょ？ あー言わなくていいよ。一目見れば判るからそういうの。人付き合いが出来ような人はうちじゃなくても採用しないよ」

……口を閉じろ

「おまえさあ。なんで飲み会に来たの？ あれほど来るなって念を押したよね？ それでも来るって馬鹿なの？ 死ぬの？」

「おまえが来たせいで飲み会の雰囲気メチャクチャだよ。責任とってみんなの分のお金、てめえで払えよな」

……死ね

頭の中で浮かぶ映像と音声。それはまるで一人っきりの映画館でスクリーンに写る映画を鑑賞しているように感じられた。

それにしてもこの映画館はクソだ。人の神経を逆撫でするクソ映画しか放映できないクソ映画館だ。

映画の主演はもちろん俺。それで出演者は糞学生に糞教授、それから糞人事に糞チンピラ。

こんな胸糞悪い映画は生まれて初めてだ。映画を製作した監督の顔面にワンツーパンチの後で金的をくらわしたいぐらい胸糞が悪い。

「ねえ。どうだった君の映画は？」

映画の暗転したスクリーンにローマ数字の『？』という文字だけがやけに存在感を放ちながら映し出される。

「どうって、こんな糞映画は生まれた初めて見たよ。こんな映画を作った監督の顔を拝みたいぐらいだ」

速水健一は映画館の椅子に深く腰掛けてどこからともなく耳に聞こえてくる声に答えた。

「お気に召さなかったのかい？ それはそれは残念」

残念と全く思っていないのだろう。謎の声の主の口調はとても明るく弾んでいた。

「この映画は君のためだけのものだし、この映画の監督は君なんだよ。速水健一くん」

「なるほど。どうりで出来栄が糞な筈だ」

「まだ続きがあるけど観て見る？」

「もういいよ。これ以上、こんなものを見せられたら泣いちゃうから」

「残念」

今度は本当に残念そうな沈んだ声で謎の声の主が答えた。

健一は椅子に腰掛けながら不快な気分を忘れるように一度深呼吸をすると両目を閉じた。

「茶番はもういいだろう。俺を元の場所に帰してくれないか」

「元の場所？ それは”どっち”のこと？」

瞳を閉じた深い闇の中で左右を中央で分断した光景が映る。

左半分には自分の部屋でキーボードを忙しそうに打ち込んでいる速水健一の姿が映っている。

右半分には警察官に両隣を挟まれ、両手には手錠をかけられた身動きが取れない速水健一の姿が映っている。

「もちろん。左の方に決まってるじゃん」

健一は迷うことなく左半分の自分の姿を指名した。

「残念。”そっち”は選べないよ」

左半分の光景が唐突に霧のように掻き消えると健一の視界に映るのは自分が警察に捕まっている姿だった。

「どうしてだよ？ ”あっち”が俺の元いた場所で合っている筈だし、俺が戻りたいのも”あっち”の世界だ。間違っても”こっち”じゃない」

「そう言われても困っちゃうな。何の因果か君は”あっち”の世界から”こっち”の世界に迷い込んでしまった迷子ちゃんなんだよね」

「俺は自分の意思で”こっち”に来たわけじゃない！ 知らないうちに”こちら”に連れて来させられて、俺がどんな理不尽な目に遭ったのか知ってるのかよ」

「うん、知ってるよ。ほら」

健一の視界にノイズが奔りまるでチャンネルが変わるように視界が切り替わる。

すっきりした画面に映るのは警察署の取調室で警察官に乱暴な暴力と身に覚えの無い罪で尋問されながら罵声を浴びせられている男の姿だ。

床で頭を抱えて蹲り「やめてください」と泣きながら何度も警察官に懇願している速水健一の姿が臨場感たっぷりに映し出されている

た。

「酷いよね。痛かったよね。苦しかったよね。悲しかったよね。とても、惨めだったよね」

「やめろ……」

「“あっち”から”こっち”に来てしまったただけなのに、自分には身に覚えの無い濡れ衣を着せられて堪ったもんじゃないよね」

「やめろって」

「ほら、君を弄っている警官の表情を見てみなよ。とーっても愉しそう。弱い物を虐めるのが大好きなのかな？ あ顔は本当の人間の中身を曝け出しているとは思わない？」

「そんなものを俺に見せるんじゃない！」

「ちょっと待ってよ」

健一は謎の声の制止する声を振り切って一人ぼっちの映画館から逃げ出した。

だが、映画館の出入り口の扉を開いた瞬間に健一は声を失う程の絶望を味わうことになる。

「やっと見つけたぞ、犯罪者」

それは先ほど視界に映る映像の中で見た顔にそっくりだった。それもそのはず、健一を精神的にも肉体的にも痛めつけた警察官の男が扉を開いた先で待ち構えていたのだから。

「ひいつ……！」

健一は悲鳴をあげると直ぐにその場で踵を返し警官から逃げようとしたが華奢な健一の肩をゴツゴツとした逞しい警官の手が掴む。

「逃がさねえぞ。さあ、今日も楽しい尋問タイムの時間だ」

「嫌だ、否だ、イヤだ、厭だ、嫌だああああっ！」

「まずは景気づけに一発いってみようか」

「ふざけるなあーっ！ あんたの”顔”なんて見たくないいつ！
消えて無くなれええええっ！」

半狂乱になりながら健一は自分の肩に載った警官の手を振りほどく。そして警官に向かって頭突きを加えて警官を正面から押し倒して活路を切り開いた。

警官が尻餅をついている間に健一は肩で息をして過呼吸で息が苦しいほどに精神を乱して映画館の出口の扉に手を添えた。

その瞬間、扉を開いた健一の視界は白一色の目映い、目を開けることすら苦しいほどの光の渦に包まれた。

「おかえりなさい。現実への生還おめでとっ」

意識が朦朧として呆然とする健一にかけられた言葉の第一声は難とも理解することのできないものだった。

頭の中で直接声が響いてくる。聴覚から得られる情報ではなくて頭の中から直接、何者かの声が聞こえるのだ。

「……あ……ん……た……誰……？」

「うん。まず初めに自己紹介したいところだけど、まず初めに君がおかれている状況を周りを見て確認したほうがいいんじゃないかな」

謎の声に促されるままに健一は自分の周囲の状況に目を向けた。

そこにあつたのは都会特有の高いビルの数々と渋滞のように車列を並べる車たち。そして遠巻きに健一を眺めている沢山の人間たちの視線。

「違う違う。そっちじゃないよ。下を見るんだ。君の足元だよ」

健一は頭に響く声に逆らうことなく自分の足元に視線を落とした。そこにあつたのはアスファルトの地面に横たわる人間が三人。

三人とも警察官のように警官の制服に身を包み、まるで死んでいるかのように身動きひとつしないし、呻き声ひとつあげることもない。

なるほど。合点がいった。三人の警官の首から上が無くなっていくんだ。だから誰も喋らないし動かない。

健一はその凄惨な光景に納得がいくとその場から一步後退してみた。するとブチュと足元で何かが潰れる音が耳に聞こえた。そして男の苦痛に歪む悲鳴も聴こえた気がした。

「ああ、踏んじやった。今、君が踏んだのは『目玉』だよ」

健一が何を踏んでしまったのか彼の頭の中の誰かが簡潔に教えてくれる。

「目玉を踏み潰せるなんて一生に一度とない機会だから残りの目玉

も踏んじやいなよ。あと五つ残ってるよ」

とても軽い口調で残虐なことを健一の頭の中で何者かが告げる。健一はその声に従い視線を足元に移して三人の死体の傍を注意深く探した。

なんてことはない。死体の傍には割れた頭蓋骨の破片と頭を覆う肉片、それから脳漿とフグの白子みたいな何かが飛び散っており、その中に光を失った五つの目玉が転がっていた。

「左から順に数えて三つ目と四つ目の奴が君を痛めつけた警官の目玉だよ。これはチャンスだ。あの警官に仕返しできる絶好の機会だよ」

その言葉を聞いて健一は動いた。足元に転がる人間だったモノをグチャグチャと踏み潰しながら健一は前進する。

お気に入りの靴が汚れるが今は気にすることはない。あの警官に仕返しができるのだから。

健一は辿り着いた。首から上が無い警官の死体の傍で自分を見上げる光りが灯らない虚無の瞳を。

そして躊躇うことなく目玉を踏み潰した。左足で警官の元左目を、右足で警官の元右目を踏み潰した。

ブチュッブチュッとふたつの目玉が潰れる音が健一の耳に届く。

そして靴の裏に感じる感触をゆっくりと確かめながら更に地面を踏みにじる。

「あーっはっはっはっはっ！　ざまあみろ、ざまあみろ！　これがアンタの結末だ！　これがアンタの最後だ！　俺を弄る時にアンタもこんなに気分の良い想いをしていたんだな！」

胸の内からスツとするととても心地の良い気分に健一の感情が高ぶ

った。

「俺はアンタに弄られる理由は無かったし、アンタを弄る理由なんてなかったのに。おっさんが悪いんだぜ？俺の話信じなかったおっさんが悪いんだからな」

残った目玉を余すことなく全部踏み潰した健一は汚れた自分の靴に眉をひそめると警官の死体で綺麗に足裏を拭った。

目を疑うような凄惨で残虐な光景に健一の一部始終を遠巻きに見守っていた人々は悲鳴を上げてその場から逃げ出す者がいれば、失神する者、携帯電話のカメラでその光景を撮影する者など様々な人間がいた。

「気が済んだかい？」

「ああ」

周りの騒がしい喧騒を無視して健一は頭の中で響く不思議な声に気分よく答えた。

「ところで、さっきから姿の見えないお前はいつたい誰なんだ？」

「僕かい？僕は《ジュエルシード》」

「じゅえるしーど？なんだよ、それ」

聞いた覚えの無い単語に健一は怪訝そうに聞き返した。

「簡単に言つと途轍もない魔力を秘めた魔法の石つてところかな」

冗談にしても、もつとマシな嘘は吐けないのかと健一は苦笑する。

「魔法の石？　なんでそんなモノが俺の頭の中で喋ってたんだよ。無機物が人間様と口を利いてんじゃないやねえよ」

勝手に許可も無く自分の頭の中で居座る謎の声の主に健一は啖呵をきつた。

「そこは、ほら。魔法の石だから」意思”を持っているから喋れるんだよ」

健一の思考が途切れる。

今のは場を和ませる駄洒落のつもりだろうか？

「信じられないが冗談じゃないみたいだな。駄洒落は余計だったけど魔法とやらを信じよう」

「今のトコ笑うところだよ」

「さすがに”石”のジョークは人間の俺にはわからねえよ」

健一は笑えない自称”魔法の石”のジョークに苦笑する。そして三人の警官の死体をゴミの見るような目で眺めながら”魔法の石”に尋ねた。

「それで、これをやったのはお前か？」

「お前だなんて他人行儀だなあ。僕と君は運命共同体なんだ。だから僕のことは名前と呼んで欲しいなあ」

「じゃあ、じゅえるしーど。お前がやったのか？」

「違う違う。僕の名前は『ジュエルシード』シリアルナンバー『
』。だから”アインツ”と呼んで欲しいな」

馴れ馴れしいただの石つころの言動に健一は苛立ちながらも舌打ちをしてから再度”アインツ”に尋ねた。

「警官を殺したのはアインツなのか？」

「そうともいえるし、違うともいえる」

「どういうことだ？」

「僕はさっき君の願いをひとつだけ叶えたんだ。その願いの結果、この人間たちはみんな頭がお亡くなりになったんだよ」

「俺の願いだつて……？」

健一は自分が何時、魔法の石に願いをかなえて欲しいと願ったのか記憶を掘り返してみたがそのような記憶は全くなかった。

頭を悩まししながら腕を組んで唸る健一にアインツが健一の頭の中で直接声を響かせる。

「君は望んだはずだよ。『あんたの”顔”なんて見たくない。消えて無くなれ』ってさ」

「あれは夢じゃなかったのか？ そんな願いは無効だ、無しだ！ それなら俺を元いた場所に還してくれよ！」

「あの時、言っただよ。」 あっち”の世界は選べないって」

「どうしてだよ！」

アインツの言葉に納得できない健一は声を荒げる。

「君の境遇が特殊すぎるから。僕は君を連れて次元を越えて他の多次元世界に移動させることはできるけど、君の”元の世界”には連れてはいけない」

「なんでだよ」

「難しくて説明しづらいんだけど、君の世界は多次元世界みたいにハッキリと次元で別れた世界じゃなくて”枝分かれ”した可能性の世界なんだよね」

「意味判らん」

サイエンスフィクション系のオカルト話にはまるで感心が無い健一にはアインツの説明は理解出来そうになかった。

「僕もよく判ってないんだ、ごめんよ。そしてその”枝分かれ”した可能性の世界へ移動するには僕だけの力じゃ魔力が全然足りないんだ」

「それじゃあ、魔力が足りれば俺は元の世界に帰ることが出来るんだな」

「うん。可能性としてはゼロじゃない」

アインツの言葉を聞いて健一はその場で嬉しさのあまりに飛び跳ねた。

「じゃあじゃあ、アインツの魔力を世界の壁を越えるまで増やすにはどうしたらいいんだ？」

「正確には魔力を増やすんじゃなくて魔力を集めるんだ」

「魔力を集める？」

話がややこしくなってきたので健一は腕を組んでアインツの言葉を一字一句聞き逃すまいと耳を傾けた。

「そうだよ。なんの因果がこの多次元世界に《ジュエルシード》が僕を含めて21個の魔法の石が空から降り注いだんだ。だから他の《ジュエルシード》を君が集めればいい」

「こんな右も左も判らない世界で21個の石ころを捜し出せだって？ 無理を言うな」

無理なことを言っただけのけるアインツの言葉に健一は落胆する。肩を落として落ち込む健一にアインツが元氣付けるように言った。

「無理じゃないよ。そのために僕がいる。どんなに離れていても《ジュエルシード》の魔力反応を感知できる僕がね」

「それが本当なら希望が見えてきたぞ」

「そう、諦めるにはまだ早いよ」

アインツの言葉を全て鵜呑みにして完璧に信じきっている健一はアインツに絶大な信頼を寄せた。

元の世界に戻る手段があるというのならアインツの言葉を信じて、この理不尽な世界で宝探しに興じるのも面白いことかもしれない。

「でも他の《ジュエルシード》を探す前に君にはやらなくちゃいけないことがひとつだけある」

「ん？ なんだよ」

「まずはこの状況から生き残ってみせることだね」

健一の頭上を騒がしい騒音をたててヘリコプターがグルグルと旋回している。

そして健一が居る都会の交差点の四方を警察の装甲車とパトカーが道路を封鎖して一般市民を交差点から締め出していた。

アインツとお話にかまけている間に健一は警察とその機動隊に周囲を取り囲まれていた。

まるで映画のワンシーンのような状況にこの場の主役である速水健一は額に冷や汗を掻いて困った様子で頭を掻いた。

「この状況を俺一人でどうにかしろっていうのか？」

「そう言いたいけど僕と君は運命共同体だからね。微力ながら力を貸すよ”相棒”」

健一の頭の中でとても頼りになるアインツの声が響いた。

「僕が君に与えた特別な力は《HEAD SHOT》。すなわ

ち人間の頭を一撃必中で弾けたトマトにしちゃう魔法の力だ」

「そんなグロテスクな技はいらねえよ。俺がゲロ吐いちまう」

人間の頭がトマトが破裂するように飛び散る様を想像して健一は嫌悪感を抱いた。

「その心配は必要ないよ。魔法の力の対価に君のもつ”理性”を貰ったから。どんなにグロテスクでショッキングな場面も怖くないはずだ」

「しれつと勝手に俺の”理性”を奪わないでくれないか？」

健一のと承も得ずにアインツは勝手に人間の”理性”を魔法の力の対価として奪ってしまったようだ。

その事実に関一は飽きれることを通り越してアインツに不安を抱いた。

「だって君のメンタルはとても脆いから人間の頭が弾け飛ぶところなんて見たら失神してしまうだろう？ それじゃあせっかくの魔法の力が宝の持ち腐れだよ」

健一の内面を熟知したアインツの言葉に関一は押し黙る。

確かに《HEAD SHOT》なんて説明を聞くからに物騒な魔法の力を使えるほど健一の精神は強くは無い。

それを見通してアインツは健一から”理性”を奪ったというのなら健一がアインツに感謝する理由はあるにしても怒る理由はないはずだ。

「ほらほら、黙ってしないで早く魔法の力を使いなよ。モタモタしていると君が《HEAD SHOT》されて死んじゃうよ」

仲間を殺されて殺気立つ警察官と機動隊の面々の憎しみと怨みのこもった視線を一点に受けて健一は息を飲んだ。

だが、その殺気を受け止めても健一の胸の内に憂いや悲しみ、それから人間を殺してしまった後悔の念は何一つ浮かんでこない。

これが”理性”を奪われるという意味なのか、と健一は落ち着いて理解した。そして自分に魔法の力を使うように強要するアインツに肯定の意味をこめて頷く。

「この世界は元から君のいるべき場所ではない。君の居場所はどこにも無いし、帰るところも無い。この世界で君は文字通り”独り”なんだ」

「言われなくても理解してる」

胸を刺すようなアインツの言葉に健一は悔しそうな顔をして同意した。

「でも安心していい。君が元いる場所に還るその瞬間まで僕はずっと君と共にある。まさに”運命共同体”だよ。君が死ねば僕も死ぬ。だから君には死んでほしくない」

「俺にはアインツの力が必要だ。元の世界に還るのにお前の力が必要だ。だから俺もお前に死なれたら困る」

これは契約。魔法の石とその力を必要とする人間との契約。

「それなら抗おう。この理不尽な世界で抗おう。君が息途絶えるまで僕も一緒に命を懸けて闘おう」

「闘ってくれ、力を貸してくれ、この俺の為だけにアインツ！」

健一の身体にとても心地の良い高揚感が包まれる。

それはきつと魔法の力。健一の知らない、人間が理解出来ない不可思議な異能の力。

「額に手をかざして」

アインツの言葉に従って健一は自分の額に左手の掌をかざす。

掌がとても熱い。火傷してしまいそうなほど熱いエネルギーが健一の額から溢れ出していた。

健一の額には植物の種のような形をした碧眼の瞳を思わせる結晶体が額に埋め込まれていた。その結晶体が『アインツ』でもあり《ジュエルシード》である。

結晶体が目映いばかりの光の奔流を溢れ出してそれを見る者たちの目を惹いてやまない。

健一は額にある異物の感触を掌で確かめるように優しく触れた。

「《HEAD SHOT》起動確認。《type gun barrel》展開開始と同時に四方への制圧射撃を開始」

アインツが機械的な口調で健一に告げる。

すると健一の背後からいくつもの砲身が顔を覗かせた。それは銃というにはあまりにも繊細で綺麗な宝石のように輝く結晶体の集合体だった。

なにも無い空間から突如として現れた宙に浮いた”銃”のようなものに警官隊と機動隊たちは怖気づいて一步後退した。

「これから一方的な虐殺が始まる。これから理不尽なまでの殺戮が行われる。でも悲しまないで。君達人間の尊い犠牲は健一の生きる

糧になるのだから」

アインツが警官隊と機動隊の人間たちの頭の中に直接語りかける。

「不思議な”因果”と奇妙な”縁”で結ばれてしまった僕達のこの先に幸がありますよに……」

一瞬の静寂。機動隊の一人の隊員が盾を構えて緊張のあまり唾を飲んだ。

「てえっ！」

健一の意味がアインツの引き金を引く。

この瞬間、日本史上初めての異能者との戦闘記録が歴史に記されることになる。

その戦闘記録には異能者『速水健一』の名前とその残虐非道な経歴から『人類の敵』と記されていた。

第2話（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております。

第3話

「はあっはあっはっ。特ダネ特ダネ。こんなビッグなネタを撮り逃してたまるかってんだよ！」

息をゼエゼエと息苦しそうに吐きながら壮年の男が人気の無いビルの非常階段を屋上へと向かって昇っていた。

非常灯の頼りない灯りを頼りに薄暗い非常階段を息を切らしながら疲れて限界を迎えそうな両脚に鞭を打って壮年の男が階段を昇っていた。

顎に無精髭をたくわえ時折口元から涎を垂らして必死な形相を顔に浮かべて走る壮年の男の名前は柴田英雄^{しばたひでお}。

柴田はゴシップ記事専門を取り扱うフリーのジャーナリストで会社ではいつも窓際の席で肩身の狭い思いをしていた。

そんな彼が何故、こんなにも必死になってビルのエレベーターを使わずに非常階段を昇っているのかといえばそれは彼が今いる場所が立ち入り禁止区域だからだ。

詳しい事情は柴田には判っていないがスクランブル交差点を中心に半径700mに亘って警察と機動隊の介入がありその地域は関係者以外の立ち入りが禁止されたのだ。

柴田もその例にもれず立ち入りが禁止されているのだが警察の警備の目を盗んでスクランブル交差点から300m程の位置にあるビルに飛び込むことに成功した。

柴田のジャーナリストとしての長年の勘が彼に告げるのだ。誰も目にしたことの無い特ダネがすぐ目の前にあるのだと柴田の本能が告げるのだ。

「うおらあっ！ 邪魔だってんだよっ！」

鍵の閉まったビルの屋上へと続く固い扉を蹴破ると柴田は空がとも近く感じられるビルの屋上へと出た。

興奮のあまり息を肩でしながら柴田は落ち着きの無い様子で屋上の上でウロウロと特ダネを捜して歩き回る。

そして柴田は片手に民生用ビデオカメラを携えてカメラを回しながら屋上の端へと移動した。

「おいおい、マジかよ。冗談じゃねえぞ……」

息を吞んで特ダネを見逃すまいとカメラを必死で回しながら柴田はビルの屋上からスクランブル交差点を見下ろした。

柴田が見たのはまさに特ダネとしてはトップクラスになるのは間違いない。新聞の表紙を飾ること間違いないトップニュースを柴田はカメラで撮影し続けた。

「なんて数の人間の死体だ。ひいふうみいよあ……ちくしょう数えきれねえか。オレは戦場のカメラマンになった覚えはねえぞ」

カメラのレンズの先にあつたのはスクランブル交差点の中央を中心にして輪を描くように囲む人間たちの死体だ。

それも100人ときかない数の警察官と機動隊と思われる人間達の首から上の頭が消え去った死体が山のようにアスファルトの上で横たわっていた。

地獄の血の池を再現したらきつとああなるだろう。

人間の『耳』『鼻』『目』『歯』『舌』『頭蓋』『脳』が皮膚を突き破り肉片を四散させて血の海に転がっていた。

咽返りそうな濃厚で鼻を突く血の臭いと凄惨すぎる現実離れた光景に柴田は口元を掌で抑えた。

そして柴田は見てしまった。屍の山の頂で唯一生きている人間がひとりだけいる姿を視認してしまった。

「生存者？ それにしても若いな……男か？ それにしては少し様子がおかしかねえか？」

ビデオカメラのズーム機能を駆使して柴田は生存者ひとりにピントを合わせてカメラを向けた。

若い男はカメラの先で頭の無い死体の身体を手探りで何かを探すようにさぐっていた。

「……笑っていやがる」

柴田は驚愕した。若い男は屍の山の中で宝探しでもするように愉しそうに笑顔を顔に浮かべているのだ。正気の沙汰ではない。

PTSD（心的外傷後ストレス障害）？ それとも物狂い？

柴田は考えられる限りの可能性を思考したが何故、若い男がひとりだけ笑いながら死体の山の中にいるのか到底理解できなかった。

何故、この時柴田が若い男こそ屍の山を築いた張本人だと考えられなかったのか？

それほど現実離れた光景だったし、たった一人の人間に二百では潰しのきかない機動隊の人間達が頭を奪われたなどと考えられるほど柴田はブツ飛んだ思考を持ち合わせてはいない。

「……ん？ なにか言っている。独り言か？」

ビデオカメラの先で若い男が誰かと話すように身振り手振りである場で忙しそうに喋っていた。

死体に向かって話している様子は無い。それならいったい誰と話しているのか？

柴田は注意深くカメラで若い男の様子を観察していると不意に若い男と目が合った。

「っ!？」

気が付かれた!

柴田は慌ててその場で身体を低くして屋上の壁に身を隠す。

緊迫した状況に逃げ出そうかと思ったがこのまま特ダネを逃せるはずも無い。

柴田はしばらく大人しくして、その後で様子を窺いカメラの撮影を続行することに決めた。

「驚いたなあ。こんな近くにマスコミの人間がいたなんて……」

「なんだとう?!」

安心していた柴田の背後で不意に聞こえた若い男の声。

突然の来訪者に心臓が飛び出すかと思うほどの驚きを見せると柴田は背後を振り返り、その人物に視線を向けた。

柴田に睨まれるようなかたちで彼の正面に立つ来訪者は凄味があ
る柴田の様子に肩を竦ませた。

「おまえ……どうやって此处まで昇ってきた」

物怖じしない柴田の問い掛けに来訪者は当然と言わんばかりに答えた。

「もちろん。エレベーターを使ってですけど」

来訪者の答えに柴田は満足がいかず真実を追究するジャーナリストの癖で声を荒げて再び問い詰める。

「さっきまでおまえは交差点の中央に居たはずだ！　こんな短い時間で、一瞬と言ってもいい短時間でどうやってここまでやって来た！」

柴田の問い掛けに不敵な笑みを浮かべて来訪者は口を開いた。

「魔法を使つてですよ。オジサマ」

その瞬間、来訪者の額に埋め込まれた結晶体が淡い光を漏らした。

それはまさに一方的な虐殺だった。人間が為す術も無く圧倒的な力量差で、人知を超えた魔法の力に蹂躪される様はまさに地獄絵図だった。

「すーっげえなあっ！？　これが魔法の力って奴なのか」アインツ
”！　チョーッ気に入ったよ。この《HEAD SHOT》っていう魔法の”銃”は最高だよ！」

「氣に入ってもらって何よりだけど、まだ闘いは終わっていないよ健一。戦闘が始まったら敵を全て排除するまで安心出来ないんだ。氣を抜かないようにしないと、いつか死んでしまうよ？」

「うんうん。わかってるわかってるって……！　次の獲物は正面12時方向の一個師団。その両翼を殲滅しつつ退路を断ってやれ……！」

一瞬で数え切れないほどの人間の頭が風船のように膨れ上がり四散して肉片を飛び散らした。

防護ヘルメット越しに頭が破裂した人間がアスファルトの地面に

肉片がミックスされたヘルメットを転がして前のめりに倒れた。

「本当にわかっているのかな……」

阿鼻叫喚の人間達の助けを求める声をBGMに速水健一は額に埋め込まれた魔法の石の^{ジュエルシート}”アインツ”から授けられた魔法の力《HEAD SHOT》を駆使して人間達を蹂躪していく。

「ば、ば、化け物だあ！ 後ろへ下がれ下がり！ 応援が来るまで持ちこたえられない！ 撤退っ！ てったーいっ！」

「逃がさねえんだよ！ 警察は皆殺しだ！ 公僕は皆殺しだ！ 権力の犬は皆殺しだ！ ぜーんぶ俺の目的を邪魔する人間は皆殺しだ！」

健一に背を向けて逃げ出す機動隊の人間達に健一は”宙”に浮く”銃口”を向けて自分の”意思”で引き金を引いた。

たったそれだけのことで人間の頭が四散して飛び散る。それが魔法《HEAD SHOT》の力。一撃必中で人間の頭を逃すことなく四散させる狂気の異能の力。

「あーっはっはっはっは！ 気持ちがいいなーっ！ なんだろう？ 胸の内から込み上げてくるこの気持ち？ なんだこの感情は？ ”この世界”の何もかもを犯したくなるってんだよ！」

健一の背後で”宙に浮かぶ結晶体”の”銃”は肉眼では捉えることのできない”魔弾”でコンマ一秒の間に百発の以上の魔弾を発射することが出来た。

サタンが十二枚の背中の羽を開くように健一の背後にも四方に展開した十二柱の”凶器”が人間の頭をピンポイントで抉り、砕き、

粉碎する。

「お楽しみのところ悪いんだけど、ちょっとだけ僕の話聞いてもらってもいいかな？」

健一の頭の中で直接透き通った声が響いた。その声の主こそが“アインツ”であり健一の額で輝く魔法の石である。

「どうした？ 新手でも来るのか」

健一は攻撃の手を緩めると周囲の環境に注意深く気を配りながらアインツの言葉に耳を傾けた。

「安心して、新手じゃないよ。でも、それよりもちよつとだけ厄介なことかな」

「なんだ？」

「言葉で説明するよりも自分の”眼”で見てくれたほうが理解できと思うから少しの間、健一の視覚と聴覚を拝借するよ」

アインツが言葉を言い終えた途端に健一の視界にノイズが奔る。

「うわっ！？ アインツ！ 大丈夫なのか、これ？」

「痛いとか苦しいとか無いから安心して」

まるでテレビに映る砂嵐の画面をゼロ距離から見つめているような視界の移り変わりに健一は不安を抱いたがアインツの信頼に値する言葉に安心して身を任せた。

健一の視界に映る砂嵐が徐々に薄つすらと晴れてくる。

晴れた視界に映ったのは無音で何かを中継するテレビの女子アナウンサーらしき女性と彼女の背後に映る上空から見下ろしたスクランブル交差点だ。

「視野は問題なさそうだね。それじゃあ次は音量を調節してみるよ」

『……ご……ん……。これ……現……』

ブツ切りで耳に聞こえてくる何かの音声らしき声に健一は眉をひそめるとアインツに注文した。

「もっと音量を上げてもらっていいか。なにを言ってるのか判らん」

「了解。ちょっと待ってね」

『……下さいっ！ 私達は現在 x市のスクランブル交差点、その上空に居ます。ご覧頂けているでしょうか？ 私達の眼下に広がるそこには警察の機動隊の面々が地に伏して……』

それはまさに健一が居るスクランブル交差点の上空から実況中継するテレビクルーたちの姿だった。

健一は頭上を見上げた。そこには警察のヘリに紛れてテレビ局のロゴマークが刻まれたヘリコプターが健一の頭上をグルグルと旋回していた。

テレビの電波を傍受してアインツが健一の視界と聴覚を使って見せたかったのはどうやらお茶の間のワイドショーらしい。

「これがアインツが言う厄介な事なのか？」

「うん。だってこれってこの世界の人間達全てに君の存在を露呈しているってことだろう？　今更だけど、この世界で君の行動を制限してしまうようなことになりかねない」

ついに自分もお茶の間でテレビデビューか、と健一は苦笑しながらアインツが云わんとすることを理解した。

「いいんじゃないのか？　遅かれ早かれ、この世界の連中は俺が”異能者”だって気付くだろうしさ。それにもう手遅れだろ……」

健一は視界に映るワイドショーのレポートを掻き消すと現実の景色へと戻り、そこに拡がる惨状をアインツに両手を開いて示した。

「もう後戻りすることなんてできない。この世界の人間をたくさん殺した。だから俺は殺した奴の仲間や友人、それから家族や恋人に一生怨まれながらこの異世界で元の世界に還る為に《ジュエルシード》を集めなくちゃいけない」

健一の目的はあくまで《ジュエルシード》の回収。

でも違う世界から来た健一には頼れる家族も知人もいない。むしろ敵が多すぎる。この世界全てが敵だ。

健一の目的を果たすには敵である人間を殺すのは仕方が無い。障害は排除しなければならない。

異世界の人間が死ぬ。そんなこと健一が知ったことではない。

「もし俺に殺された家族の怨みで幼い子供が包丁を手に持って突進してきたら俺は躊躇い無くその子供の首を”銃”で打ち抜くと思う」

健一は頭上でプロペラの回る騒音を響かせて空を我が物顔で飛んでいる複数のヘリコプターに向かって銃口を向けた。

12柱の結晶体の凶器が銃口で天を突くように発射態勢を整える。

「だって俺は死にたくないもん。アインツも死なせるわけにはいかないもん。俺は自分の居た世界に還る為なら、女子供だろうが俺の命や目的を脅かすようなら……」

異世界で生きている生物の命など自分の命を守ることに比べたら鳥の羽より命の重さが軽い。

健一の”意思”が異世界で生きとし生けるものを標準に捉えて狙い打つ。

銃声は無音。ただ空気を裂いて何かが上空を旋回するヘリコプターに向かって飛んでいったことは明らかだった。

健一の視界がテレビのチャンネルを切り替えるように再びワイドショーのレポートに映像が切り替わる。

『キヤーッ!? 首が、首が……操縦している人の首が……!』

悲鳴をあげて顔を蒼白にしながら女子アナが現場のレポートを忘れてヘリの操縦席を指差した。

カメラマンは女子アナの様子に怪訝に思いながらも女子アナが指差す方にカメラを向けた。

そこに居たのは操縦桿を握り正面を向いて佇む首無し頭無しのヘリコプターのパイロットの姿があった。

『おいっ! ヘリの高度が落ちてるぞ! このままだと墜落す……!』

そこでレポートは強制的にテレビ局のスタジオへと映像が戻るところで中断された。

スタジオでは番組の司会であるタレントがとても気まずそうな顔をして無言で立ち尽くしていた。

健一の視界が現実に戻る。そして複数のヘリコプターが上空で旋回しつつ高度を徐々に下げて墜落していく様をその瞳に焼き付けた。

「『臨兵闘者皆陣烈在前』（臨める兵、闘う者、皆陣烈れて前に在り）」

「なんだ、それ？」

「この世界で『九字』という言葉らしい。今の健一にぴったりの言葉だと思って言ってみただけで雰囲気出るでしょ？」

「『九字』ねえ……やっぱり俺が元いた世界とあまり変わらないんだなってつくづく思うよ。そういうの聞くと変わらないもん」

「ここは『地球』だし『日本』という国だからね」

「初耳なんだけど……なんで今になってそういう大事なことを言うかな……」

「だってこの世界は君の世界から”枝分かれ”した可能性の世界だからね。それほど違いはないよ」

「本当にパラレルワールドってやつなんだなあ」

健一はアインツとこの異世界に呆れて溜め息を吐くと周囲を見回した。

生きている人間の気配は健一ただひとりとなったスクランブル交差点には健一ひとりが凄惨とした死臭が漂う場所で呆然と立ち尽くしていた。

「戦闘は終わったみたいだし、これから戦利品をもらいに行こう」

「戦利品？ なんだい、それは？」

「俺は今、自分の財布を警察に没収された無一文のドン底貧乏人だからな。一応この世界でどれ位かは知らないけど生きていかなくちやいけないから、その生活に先立つ資金を貰おうと思う」

「金銭かい？ 君にそんなものは必要ないと思うけどなあ。欲しい物は奪えばいいじゃないか。人間達を殺してでも」

アインツの当然と云わんばかりの口調に健一は苦笑した。

「俺は”理性”を失くしても人間社会で生きる”常識”は失っていないよ。人殺しは娯楽じゃないし、この世界でも犯罪だと理解しているけど、闘わなくちゃ生き残れないから仕方なく殺しているだけだ」

「人殺しが”常識”って言ったって説得力がないよ。僕には健一達人間の考えは判らない。けどとても健一には惹かれるんだ」

嬉しいことを言う、と健一はアインツの言葉に微笑んだ。

「魔法の石には判らないかもね。『無用な殺生はいつか身を滅ぼす』なんて言葉があるような国だから」

「やっぱり僕には意味が判らないよ」

「”こつち”での生活が落ち着いたら、そのときはアインツと腹を割って話そう」

「僕には割れるような”お腹”ないよ」

「言葉のあやだよ。そのまんまの意味で受け取るなっつての」

健一は自分の額に埋め込まれた魔法の石を軽く掌で叩くと苦笑した。

この異世界で唯一自分の味方でいてくれるアインツに健一は生まれて初めて家族以上の信頼をアインツに捧げていた。

それは家族以上に安心できる居心地と精神の安定を約束させてくれる存在。健一の希望の星。

「死体を漁ろう。服の中に財布ぐらい入っているはずだから」

健一は屍の山を崩しながら首から上が無い死体の身体に手を突っ込み金銭類を捜した。

健一の予想通り、呆気なく大量の財布が死体のポケットから見つけ出すことが出来た。

その回収した財布のひとつを開くと中から小さな写真が一枚ヒラリと風に乗って死体の上に落ちる。

「妻子がいたんだな……」

写真の中で幼い女の子を抱きかかえて、隣に佇む女性と一緒に笑顔を浮かべて微笑む男。

家族団欒の笑顔の輪を写した写真を死体の上から拾い上げて健一はそれを縦に破り捨てた。

「どうして破ったんだい？」

「どうしてだろう。俺があの写真の中で微笑む女の子の父親を殺したことに後悔の念や怒りがあったわけじゃないんだ。でも、どうしても胸が締め付けられて写真を見ていられなかったから破いた」

「そっか」

死臭と一緒に風に乗って二つに裂かれた写真がスクランブル交差点の上空へと天高く上っていく。

それを眼で追いながら健一は自然と視線を上空へと向けた。

「ん？」

健一の視界の隅で一瞬、何かが閃いた。

健一が見上げる視線の先、都会のビルの中に生える少しだけ他のビルより背の低いビルの屋上で何かが閃いた。

「視力を魔力で強化してみようか」

そんなことまで出来るのか、と喉元まで出かけたが健一は無言でアインツの言葉に頷いた。

健一の瞳に魔力の力が宿る。すると高性能の双眼鏡を覗いているように健一の視力は人間の限界を超えた。

「ビルの屋上でこっちをずっとカメラで撮影しているオジサマがいるな……」

肩手持ちのビデオカメラを健一に向けて顎に無精髭を蓄えたいかにもジャーナリストっぽい壮年の男がビルの屋上から健一を盗撮していた。

「あつ隠れちゃった……」

遠く離れた位置から屋上にいることを健一に勘付かれたことに気が付いた壮年の男は慌てた様子で身を隠した。

「ほつとく訳にはいかねえよなあ……」

「《HEAD SHOT》を使って撃ち殺しちゃいなよ」

アインツが躊躇うことなく目撃者を健一に殺すことを提案する。
だが健一は腕を組んで「むう」と唸りながらアインツの提案を渋った。

「たぶんあの人はマスコミの人間だ。この世界のことなら大体のこととは知っているはずだし、《ジュエルシード》の情報を集めるのに一番、適した人材だと思う」

「それじゃあ……」

「うん。殺さない。あのオジサマにはこの世界で俺の為に働く”協力者”になってもらおう」

「自分の為だけに人間に労働を強いるのって”奴隷”っていうんだよ」

「細かいことは気にしない。さて、どうやってあのビルの屋上まで移動しようか」

「僕の出番だね」

「アインツ？」

「”転送開始”しまーす」

「あつちよつと、おいコラ」

狼狽する健一を無視してアインツは魔力を膨らませて、その魔力で健一の身体を包み込む。

健一の身体が魔力で編まれた箱の中に収まるとスクランブル交差点から速水健一は跡形も無く姿を消した。

「魔法だつてえ？ うんなもん信じられるかよ。こちとら腐ってもジャーナリストだ。そんなオカルトを信じられるほどジャーナリズムの世界は甘かねえよ」

「ごもつともな意見だと思えます。でも事実は変わりませんから」

ビルの屋上で二人の人間が対峙していた。

ひとりとは速水健一。そしてもうひとりは柴田英雄。

柴田は健一の額で光る結晶体にチラチラと興味がありアリの視線を向けて言った。

「おめえさんに訊きたい事がいくつもあるんだが、ひとつだけオレに教えてくれないか」

「なんででしょう？」

健一は首を傾げて柴田の質問を待った。

柴田はしばらく間をおいてから深呼吸すると息を大きく吸い込ん

でから口を開いた。

「下の惨状はお前がひとりでやったのか？」

「一人じゃないですよ。”アインツ”の協力があつてこそ出来たんです」

即答。間を置かないで人殺しをしたことを宣言した健一に柴田は恐怖で背筋を凍らせた。

こいつはそうとう”イって”やがる、と柴田は健一から一步後ろへ後退して距離を置いた。

すると健一も柴田を追うように一步前に前進。柴田の顔が引きつった。

「一人じゃないと言ったな。”アインツ” 誰だ、それは」

「次はこちらからの質問です。交互に答えましょうよ、ね？」

健一が更に一步前に前進する。それに合わせて自然と柴田は後ろへと後退する。

柴田が自分から距離を置こうとする行動を面白そうに観察しつつ健一は左手の掌を額の”アインツ”にかざした。

「アインツ。《HEAD SHOT》起動させる」

「了解」

柴田は健一の不可解な行動の意味が読めず、更に一步後退した。健一も柴田を追って前進する。

柴田は自分の眼を疑った。健一の背後の空間が歪み出したのだ。

そしてその歪んだ空間からとても大きな結晶体で出来た”銃”の
ようなものが自分に向けて銃口を構えているのだ。

「な、な、なんだっ！？ なんなんだ、それは！」

「俺が質問する番ですよ」

狼狽する柴田の質問を無視して健一は笑顔を柴田にむけると両手
を開いて芝居がかった口調で口を開いた。

「大事な質問ですからよく考えてからお答えくださいね。さてあ
なたに質問です。『今”死ぬか”後”で死ぬか”どっちが好み
ですか、オジサマ？」

柴田英雄。四十四歳、独身で妻子は無し。

自分の命を天秤にかけた一生に一度しかない質問に柴田の心は大
きく乱されることになる。

「こういう台詞死ぬ前に言ってみたかったんだあ」

間の抜けた緊張感の欠片も無い声の主は速水健一。

可能性の世界からやってきた一般人は自分の台詞に心を酔いしれ
ながら柴田の返事を気長に待った。

第3話（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております

第4話

人口密集地にあるアスファルトの地面から空を目掛けて竹の子のように生えるビルの摩天楼。

人間が創り出した無機質で冷たいコンクリートのジャングルは外界の自然を破壊して人間好みの生活環境へと変貌させていた。

《健一、日が暮れてきたよ》

「ん、もうそんな時間なのか。観てみなよ”アインツ”綺麗な夕焼けだ」

コンクリートの砦の天辺。空が近いビルの屋上で速水健一は地平線の彼方でゆつくりと沈んでいく紅の夕日に目を向けて感慨深く呟いた。

《視えてるよ、健一。”この世界”も夕日が沈む景色は絶景なんだね》

健一の感想に彼の額に埋め込まれている宝石が夕日の暖かい光を反射しながら同意するように答えた。

「ああ、”他の世界”の夕日は知らないが”この世界”の夕日が沈む景色もなかなかのものなんじゃないか？」

《うん。とっても綺麗だ》

「そっか。”魔法の石”のお前にこの景色の御墨付きを貰えるのならきつとどんな世界でも通用するんだろっな」

センチメンタルな気分に浸りながら健一は視線を沈みゆく夕日から人気の無い屋上の端に移した。

そこには宙に浮いた虹色に輝く結晶体で出来た幻想的で現実味が無い”銃”のようなモノに銃口を向けられて堪らない想いで後ずさる中年男性が居た。

「そろそろ、俺の問い掛けへのお答えをいただいていいですか、オジサマ」

「そのオジサマってのはやめろっ！ 男のてめえに言われても色気がなくて気色が悪いわ！ オレには柴田英雄っていう名前があんだつての！」

柴田は撮影用のビデオカメラを大事そうに胸の内に抱えて口調を荒くしながら健一の言葉に反論した。

命の危険に身を晒されながらも精神を強く保ち、なおかつ啖呵をきる余裕さえもある予想外の柴田の反応に健一は面食らった様子で呆気にとられる。

《随分と肝が据わったオジサンのようだね》

健一の額の上ですつと柴田の事を観察していたアインツが柴田に対する第一印象を健一に淡々と告げた。

「そもそも、てめえの質問からしておかしいんだつての。なにが『今死ぬか後で死ぬか』だ。結局のところオレはてめえに殺される結末しか用意されていないってことじゃねえか」

柴田は自分がおかれている状況を冷静に判断した結果、自分がこ

の場で殺されることと後で殺されることを理解してなおも健一に食って掛かった。

「いいか、オレはジャーナリストだ。人間社会の最前線で玉砕覚悟の気持ちを持っていつもオレは色んな修羅場をカメラひとつ身体ひとつで取材してきた」

柴田の瞳に壮絶な力が宿る。その眼光に気圧された健一が後ずさった。

「暴力団の抗争から麻薬の取引現場、児童の人身売買に、はたまた違法カジノ。そうだなあ……最近だと『龍』^{リオン}なんて呼ばれていたテロ組織の跡を追っていた」

淡々とした口調で説明しながら柴田は自分の取材人生を想起して顎にたくわえた無精髭を片手で擦る。

柴田の想像以上に危険な仕事っぷりに興味を抱いた健一は柴田に向けていた銃口を静かに降ろして話を促した。

「解るか？ 上っ面だけの平和の裏にある悪意に満ちた世界にオレは魅入られた。好奇心の塊みたいな人間のオレの性分は我慢できねえんだよ。禁忌を知りてえ！ ってな」

禁忌に魅入られた人間のみせる世界の話は異世界に移動する前まで普通に暮らしていた健一にはとても刺激が強かった。

沈む夕日の光を背中に受けて柴田はニンマリと”普通”の人間が見せることはない歪んだ笑顔を健一に向けた。

「人間の醜くて汚く、卑怯で欲望に満ちたえげつねえ世界。オレはそんな世界を、オレの想像を、期待をいつだって超えてくれる素晴

らしい世界を全部知りてえ！」

それは好奇心というにはあまりにも度を越えた思考回路だった。常人では理解出来ない境地に柴田英雄という男は確かに存在している。それを健一は彼の言動から理解した。

「だから、オレはてめえみたいなオカルト電波全開のイカレ快樂殺人鬼でチンコ押っ立てサイコパス下種野郎にくれてやる命はねえんだよ」

常人では理解出来ない境地にいる男からの罵声もまた常人ではなかった。

酷い言い草の柴田に健一は額に青筋を浮かべて引きつった作り笑いをした。

結局のところ柴田は健一に殺される気など微塵も無いし裏世界の全てを知り尽くすまで自分は死ぬ気も殺されるつもりもないと言いたいのだろう。

罪の無い公僕を皆殺しにした元一般人『速水健一』と禁忌に魅入られたジャーナリスト『柴田英雄』。いったいどちらが狂っているのだろうか？

《とんでもない口の悪さだけど、予定通りあのオジサンを”協力者”として誘うのかい？》

柴田の狂人的な言動に呆然として本来の目的を見失いかけていた健一にアインツが思い出したように告げる。

「酷い言われようだけど、俺は柴田さんのことが気に入ったよ。絶対に協力してもらおう」

俄然として柴田に魔法の石を探す協力者になつてもらいたいという気持ちが強まった。

客観的に見て柴田の内に秘めた人間性は柴田本人でも御し切れないほど危ういものだ。だが、それを上手く手綱を握り制御することが出来れば心強い戦力になることは必須だろう。

「おい。さっきから独り言が目立つが……… いったい、誰と喋ってんだ？ てめえにしか見えないお友達と喋ってんなら精神病棟に通うことをおすすめるんだが」

殺気の消えた雰囲気には柴田は落ち着いた様子で健一に怪訝な顔をして訊いた。

「ああ、そういえば紹介がまだでしたね。俺の額にある宝石が……」

健一が自分の額の上で輝く”魔法の石”《ジュエルシード》を指差してアインツのことを柴田に紹介しようとした時、異常事態が起こった。

何も無い空間から虹色の輝きが漏れ出した。そして、健一と柴田の二人を囲むように360°。全ての範囲を虹色に輝く結晶体が隙間無く縦に並んで壁を造り出したのだ。

突然、頭上以外の視界を結晶体の壁に塞がれた健一は咄嗟の出来事で動転している柴田を無視してアインツに落ち着いた様子で訊いた。

「生き残りの警察が攻撃を仕掛けてきたのか？」

《ううん。今度の敵は警察じゃない》

アインツの返答に健一は首を傾げた。

《今現在、僕達は射程約500mの範囲内からの狙撃を受けているよ》

「狙撃だつて？　つまり銃器で俺たちを狙っているってことか」

銃器での集中砲火、確かに警察には手におえないほどの制圧方法だ。

健一は耳を澄ませた。すると分厚い結晶体の壁に弾かれる銃弾の音が所狭しと健一の周囲から聴こえて来た。

柴田も自分たちが何者かに狙われて狙撃を受けていることを理解したようで身体を地面に伏せた。

《うん。しかも向こうは健一とオジサンを殺す気満々で狙ってきてるね。今、この場から抜け出したら全方位からの銃弾の嵐で健一は蜂の巣だよ》

アインツの淡々とした説明に健一は銃弾で蜂の巣にされる自分の姿を想像して背筋を凍らせる。

「反撃は出来ないのか」

《今は防御に《HEAD SHOT》の能力を使用しているから無理だ。本来は防御する為の力ではないからね》

「そっか。ならこの盾はあとどれ位の時間もちそうなんだ」

《時間の概念で言えば半永久的には保てるよ。一応これでも魔法の盾だ。狙撃銃如きでは盾を貫けないよ》

「それを聞いて安心した。でもこれじゃあ、こちらもあちらも手詰まりだな。決定打に欠けるし」

《そうでもないみたいだよ》

「なんだって？」

《複数の生体反応が手に熱量の高い物体を持ってビルに接近してきているんだ》

「それがどうしたんだ」

《想像してみて、健一。ビルを内部から多量の爆弾を使って爆発させると思う？》

「そりゃあ、ビルの骨組みが壊れてビル自体が崩れるだろ」

《正解。じゃあ、そのビルの屋上で立ち往生している人間はどうなると思う？》

アインツの言いたいことを理解した健一は額に嫌な汗を掻きながら引きつった笑みを浮かべた。絶望の状況では笑うことしか出来ないのだ。

「アインツ、お前は魔法の石だ。そう魔法だ。魔法と叫びたら空を飛ぶことだろう？ もちろん、お前の力で空を飛ぶことぐらい朝飯前なんだろう？」

《健一の期待に堪えられなくて残念だけどそれは無理だよ》

「なんだって!？」

予想外のアインツの答えに健一の声が裏返った。

「お前っ飛べないのか!？」

《うん、飛べないよ。あれ？ 事前に言っていなかったっけ?》

「聞いてないぞ！」

《ゴメンね》

「そうだ、俺がビルの屋上まで瞬間移動で移動出来ただろう？ あれでここからまたどこかに移動するのはどうだ？」

《出来ないこともないけど》 HEAD SHOT 《の能力を展開中は空間移動は無理だよ。能力を解かないとあれは出来ないんだ》

「マジかよ。能力を解いた瞬間に狙撃銃で俺たち蜂の巣確定コースじゃないか」

《僕にもっと魔力があれば能力を展開中でも移動できるんだけどこればかりは諦めてくれ》

「それじゃあ、ビルから落下する衝撃を殺して着地することは？」

《それは出来るよ。ただし、ひとりだけしか助けられない》

思った以上に制約の多い魔法の石の力に健一は落胆した様子で力なくその場で座り込んだ。

自分達を守る結晶体の盾の防御を解かないと空間をワープ移動することが出来ない。

防御の盾を解いてワープ移動しようとする周囲から狙撃を受けて重傷かあるいは命を落とすかの二択しか選択肢がない。

このままビルの屋上で立ち往生しているとビルごと爆破されてビルの屋上から地面に落下、落下の衝撃を殺せるのは一人だけ。

健一か柴田のどちらかが死ぬ。柴田を失くすのは惜しい。

「詰んだかもしれない」

魔法の力を過信して調子に乗っていた健一は己の力の限界を知らなかった。

そんな絶望的な状況に健一の口から諦めの言葉が出てしまったのは必然なのだろう。

「どうした？ 今にも自殺しそうな若者の顔をしてんぞ」

アインツの声を聴くことが出来ない柴田はずっと健一の独り言を聞いていた。そして断片的にはあるが自分が健一の足手まといになっていることを理解していた。

「どうした。お得意のオカルトパワーでなんともならないのか」

「すみません。このままだと柴田さんが死んじゃうかもしれません」

柴田を見捨てればこの窮地を跳ね返して生き残ることが出来る。だが、健一には柴田が協力者として必要だと決心してしまった覚悟がある。

「おいおい。さっきはオレのことを殺すなんて言っておいてなんて

ザマだよ」

「あれはちょっとした冗談みたいなものだったんです。本当はあなたに俺の協力者になって頂きたかった」

「協力者だつて？ いったいなんで」

「アインツ……いや、”魔法の石” 《ジュエルシード》を俺と一緒に探してくれる現地協力者が欲しかったんです。柴田さんはジャーナリストだから情報を集めたり纏めたりするのはお得意でしょうから、きつと俺の目的の為に役立ってくれると……」

健一は正直に柴田が自分に必要な存在であることを話した。

それを聞いた柴田は落ち込む健一の横に立つと豪快に健一の背中を叩いた。

「馬鹿野郎っ！ それを早くオレに言わねえか！ そんな好奇心のくすぐられることをオレが協力しないわけがねえよ」

バンバンと力強く背中を叩かれて健一は堪らず咳き込んだ。

「なにするんですかっ！？ 痛いですってば！」

「うるせえっオレを虚仮にした罰だ。男なら黙って堂々と胸を張っていやがれってんだよ」

まるで父親のような柴田の豪快な物言いに健一は目を白黒とさせて呆気にとられる。

「いいか、オレはてめえのことは気に食わないがてめえの宝探しに

付き合ってやるって言っただよ。このオレに任せれば魔法の石だか漬物石だかなんてあつという間に探し出してやるよ」

「協力してくれるんですか!？」

「だからさつきからそう言っただろうが。ただし条件がある」

「条件ですか？」

「周りを見ての通りオレはてめえと関わったことで命を狙われるような厄介な事に巻き込まれた。だからてめえは絶対にオレの命を守れ。オレも宝探しに命を賭けてやる。だがてめえはオレの命を守れ」

「……わかりました。柴田さんの命は俺とアインツが守りましょう」

僕も一緒に守るのかい?とアインツが健一に抗議するが健一はそれを無視。

柴田を守ることを約束に彼の協力を得ることが出来た健一は彼の命を守りながら危機的な現在の状況を打破する策を考えようと柴田との話を切り上げようとした。

「まだ話は終わってねえぞ。あとてめえの宝探しに関わっている間の衣食住を用意しろ。その間で消費する金は全部てめえもちな」

危機的な現在の状況を打破する策を考えていた健一の思考が柴田の提案に寸断され現実に戻された。

「せ、せこいつすよ柴田さん!」

「うるせえっ! こちとら万年金欠の貧乏ジャーナリストだ。それ

ぐらい多めに見やがれってんだ」

「わ、わかりました。なんとかしてみます」

自分の意思で異世界に来たわけではない健一は異世界での衣食住や金銭面での問題をまだ片付けてはいなかったがこの場は黙って柴田の要求を呑むことにした。

「それとな……」

「まだあるんですか……！」

「あたりまえだ！ こちとら命を賭けてんだ。まだこんなもんじゃねえぞ」

「その話は後にしてもらっていいですか。この場から逃げ出す方法を思いついたんで」

「チツわかったよ。オレもてめえも死んじまったら意味ねえもんな。それで、その逃げ出す方法ってのはどういふんだ」

「口で説明するより実践あるのみです。柴田さん、すこし歩きますよ」

「お、おう」

覚悟を決めて腹を括った健一の力が宿った瞳に気圧されて柴田は黙って健一の指示に従った。

健一と柴田の二人の周囲を囲んでいた結晶体の壁が二人が歩くのと一緒に床から1cm程浮いた状態で二人を銃撃から守るように移

動する。

健一たちが移動する間も銃撃は止む事はなかったが魔法の力で生成された結晶体の盾を貫けるほどの力は現代文明の凶器には無かった。

「着きました。ここが俺たちの終着地です」

「終着地って、本気で言ってるのか……」

健一と柴田が着いたのは文字通り屋上の端っこ。そこから一步足を踏み外したら地面まで真っ逆さまに落下して地面に咲くヒナゲシになるだろう。

「アインツ、これから俺と柴田さんはここから飛び降りる」

「ちょちょちょっと待ってえー!」

突然のビルの屋上からの紐なしバンジージャンプ宣言に柴田は顔面蒼白で健一に掴み掛かった。

「オレの命を守れて約束したよな!？　なんでいきなりてめえと無理心中しねえといけねえんだよっ!」

とんでもなく高い場所から見下ろす地面は目眩がして足元がふらつくほどに心細く、そして恐怖の対象であった。

「落ち着いてください。別に自殺するって意味じゃないですって」

「おおお、落ち着いてビルの屋上から飛び降りれるかっ!」

「じゃあ、そのままでもいいです。アインツ、俺の考えどおりにお願
いね」

《了解。幸運を》

健一の思考と同調しているアインツは健一が何をしたいのか齟齬
なく完全に理解している。だが柴田は健一の考えが理解できていな
い。

「はあーっふうー……っ！」

健一は一度だけ大きく深呼吸すると下の地面を見ないように正面
を向いたままビルの屋上から飛び降りた。

「本気がっ！？ 正気じゃねえよ！」

眼下に落ちていく健一の小さな姿を柴田は四つん這いになって身
を乗り出して目で追う。

《オジサンもいくよ》

「へっ？」

柴田の頭の中に聞いたことのない機械的な口調の声が響いた。そ
して柴田を銃弾から守っていた結晶体の壁が柴田の突き出した尻を
後ろからトンと押した。

不可抗力で後ろから不意を衝かれて押された柴田は頭から地面に
向かってビルの屋上から飛び降りた。

「ふざけんじゃねえぞおおあああああー！」

健一の後を5秒も経たないうちに柴田は健一を追うようにアインツに飛び降りさせられた。

健一と柴田が飛び降りた瞬間にビルの屋上で彼らを守っていた結晶体の盾は光の霧となつて一瞬で消え去った。

そして、結晶体の盾が消え去るのと同時に屋上から飛び降りた健一と柴田の肉体を虹色の光りが包み込む。

「いいいいやああああああ」

柴田は自分を包み込む不思議な光の現象にまで気が回らないように刻一刻と目の前に迫る地面の恐怖に悲鳴をあげていた。

「アインツッ！」

《転移開始》

健一が地面にぶつかるコンマ一秒とないギリギリの瞬間、速水健一と柴田英雄は光の奔流に呑み込まれてその姿を忽然と消した。ビルの屋上から二人の人間が飛び降り、そして光の繭に包まれたかと思つたらその姿はどこにもなかった。

現実味の無い、でも目を奪われてしまうほどに幻想的な現象の一部始終を見ていた数十人の狙撃手たち全員がその光景に息を呑んで本来の仕事を忘れていた。

これが日本史の中で初めて遭遇する魔法使いたちの転移魔法を目撃する瞬間だった。

第4話（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0645z/>

妄想の世界

2011年12月16日16時47分発行